

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所  
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203  
Tel. (045) 671-1109  
振替 00200 - 1 - 47369  
E-Mail: naka-ch@hb.tp1.jp http://church.jp/naka/  
発行者 堀江有里 (題字 松橋 順)

## 宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

## (牧師として) 「地域に学ぶ」とは何か？

【前編】

### 堀江有里牧師に聞く



4月23日学習会にて 堀江牧師

あるのに気付くでしょうか？  
いまは公園になつていますが、実は、この木々は、その先に見える劣悪な住宅環境を隠すために立てられたものだったそうです。京都駅周辺は、第二次世界大戦後

が立ち並ぶ一画があるのに気付くでしょうか？  
いまは公園になつていますが、実は、この木々は、その先に見える劣悪な住宅環境を隠すために立てられたものだったそうです。京都駅周辺は、第二次世界大戦後

本年4月、なか伝道所の主任牧師に堀江有里牧師が就任された。堀江牧師は、京都のお生まれで逗子の育ち。横浜共立学園高等学校卒業後、同志社大学神学部に入學、同大学院博士課程(前期)修了。以後、京都に住んで、日本基督教団京都教会副牧師、NCC関西青年協議会事務局長(専従)などを歴任された。信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会(ECCA)を仲間たちと一緒に設立、後に代表として活動。大阪大学大学院で博士の学位を取得。花園大学、立命館大学、龍谷大学、関西学院大学などの非常勤講師を務めてこられた。

○京都と横浜  
私は京都で生まれ小二から神奈川で育ちました。中学高校時代を横浜で過ごし、その後、この三〇年間は京都で生活してきました。京都と横浜、どちらも観光都市として知られていますが、そのイメージに覆い隠されている実態もあります。これまでの体験を通じて、自分自身があるため教会の牧師として立つときに、教会と地域の関係をどのように考えられるか、何を学んでいきたいか、どのような問いが立てられるか。私が今考えていることをお話しします。

### ○京都・東九条地区

には闇市がつくられ、バラックが立ち、そこに人びとが生活していた。それを強制撤去し、公園がつくられたわけです。その先は東九条と呼ばれるエリアです。東九条という名前がついている地域はもともと広いのですが、第二次世界大戦後、京都駅周辺の闇市から追いやられ南に流れてきた在日朝鮮人の集住地区となった場所があります。四ヶ町(東岩本町・南岩本町・北河原町・南河原町)と呼ばれる地域です。

新幹線で東京方面から向かうとき、京都駅に到着する直前、近付いてスピードが落ちたところにトンネルがあるのですが、そのトンネルを抜けた左手にたくさん

私が訪れた一九九〇年代、東九条の町(四ヶ町)は、北側に隣接する京都最大の被差別部落・崇仁地区とは対照的でした。崇仁地区は「同和」政策のもと、一定の行政サービスを受け、街並みが整備されています。一方、「同和地区」として指定されていない地域との境目で、住宅の様子からはっきりと違いがわかります。また、四ヶ町よりもっと南にある東松ノ木町は一級河川である鴨川の河川敷(国の管轄)や土手(京都市の管轄)を不法占拠している形となっており、行政の所管が複雑に入り乱れているせいもあると、上下水道や電話などのインフラの普及も大きく遅れてきました。

## ○東九条との出会い

私がこの地域と関わるようになったのは、同志社大学神学部の一環として実施されていたフィールドワークで訪れたことがきっかけです。東九条四ヶ町にある、カトリックの団体が運営する「希望の家」という施設で開催されていた中学生学習会に参加するようになりました。小学生までは学童保育という受け皿があるので、中学に入ると、複雑な家庭事情を抱え、放課後の居場所や学習環境が家がないという子たちがいました。そうした子らは夜に街を徘徊し、次第に犯罪に巻き込まれるようなケースもあつたのです。そこで、彼女

がら幼い弟妹を食べさせるといふ時期がありました。

「メシ喰うたか？」  
という何気ない挨拶が、彼にとつてはとても重い意味を持つていたのです。家に帰れば、祖母が作ってくれた食事（当時、祖母の家から大学に通っていました）が当たり前のようについている自分は何者なのだろう、という自問がどうしても湧き上がってきました。

## ○東九条から見える壁

実は、私は東九条から鴨川を隔てたところにある京都第一日赤病院で生まれました。小学校一年生までその近所で育ちましたし、その後も年に一回は帰省していましたが、周りの大人たちからは「川のあつち側には行ってはいけない」と言われていました。大学生になり東九条と関わるようになって、どうしてこんなに近くにいたのに、自分は東九条に足を踏み入れてこなかったのだろうと考えさせられました。最初に東九条の町を案内してもらった日のこと、東松ノ木町を訪問した夕暮れ時に、自分が生まれた京都第一日赤病院の壁が遠くにポーッと浮かび上がって見えた光景が、いまでも目に焼き付いています。当時の私は、文字通り自分の立ち位置を問われたわけです。私は川の向こう側で生まれて育ってきた。そんなよそ者の自分が東九条で何ができるのだろう。自分は決してここに住んでいる人たちと同じにはなれない……。

東九条でのさまざまな体験を通じて、部落差別の問題、戸籍制度、その源流にある天皇制の問題、そして外国人差別の問題などを教えられてきました。いっしょに活動していた先輩方にも感化されつつ、私は牧師になることを決意していくことになりました。

## ○退路を断って寿地区へ

このたび、なか伝道所に赴任するにあたり、東九条の活動で出会った人たちに盛大な壮行送別会を開いてもらって来ました。

「堀江、とにかく行ってこい。しんどくなったら一年、二年といわず、三カ月で帰ってきていいぞ。住む場所も仕事もある……。」

温かい言葉に背中を押されて、しかし退路を断って横浜にやってきました。これまで何度か「訪問」はしてきた寿地区と、本当の意味で出会うためです。（「後編」に続く）  
（まどめ 幸前元）

\* \* \*

（牧師として）「地域に学ぶ」とは何か？

「後編」掲載予定内容

- ・寿地区「訪問」の過去
- ・キリスト者として、牧師として
- ・フツの教会、寄せ場としてのなか伝道所

## 風景

三年ぶりに横浜の春を堪能しました。ブラジル赴任中に肺血栓が発見されたつれあいは、帰国して千葉の病院で肺動脈内の血栓をこそげとる手術を受けましたが、体幹機能障害が後遺症として残り、五ヶ月近い入院を経て退院後、横浜市のリハビリセンター通いを続けてきました。

昨春は、入院先の千葉の病院に近い公園に車椅子を引いて外出花見を敢行しましたが、今年ハビリセンターへの道に桜並木があり、心を和ませてくれました。ソメイヨシノの固い蕾がほころび、満開の花の下で人々が花見を楽しむ頃には、昼休みのつれあいを誘って桜の下でささやかなお弁当を食べることもでき、「生還してよかったね」と、笑いあいました。

浜島橋からの兩岸の桜並木の景色は、故郷の町に似ていて、私は何枚も写真を撮りました。コブシが開き、ツツジ、ハナミツキが街路を彩り、ようやくつれあいの復職が近づいた日の礼拝後、英俊さんの先導で、教会の仲間とチューリップを見に横浜公園を散歩。横浜に帰ってこれたことを実感しました。

これまで夢中で日々を送ってきましたが、テレビに映し出される国会の様子には、ただならぬ劣化を感じます。任命権をもつ首相に逆らわず、〈私の言うことをよく聞いて、しっかりと付度（そんたく）してください〉などというふざけた言葉に「うけて」みせる議員たち。気遣う相手が違います。桜は季節が終われば散ってこそ次にまた咲くのでしょうか。税金を栄養にして身を肥やし、民主主義を腐らせる権力者と「議員」諸氏には、速やかに散ってほしいものです。  
（小笠原公子）

使信

# 《居場所》の在処

堀江有里

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

(ヨハネによる福音書一四章一〜四節)

## ■神とともにある「場所」

独自の神学をもつヨハネによる福音書は、十字架刑への道筋においても独自のイエス物語を展開しています。

ペトロがイエスを裏切ることが予告される直後の出来事。騒然とした人びとの状況のなかで、イエスは「心を騒がせるな」と切り出します。目の前にある事柄のなかで右往左往する。よくあることです。そんな人びとの姿を前にイエスは「落ち着け!」とうながす。少なくとも、そんな声かけをヨハ

ネ福音書の記者はイエスに語らせています。

イエスが「おとうちゃん(アツバ)」と呼びかけた神の存在も、いつの間にかやが厳格な父の姿として昇華されているのは気になることです。しかし、ここでは、神とともにある場所について考えていくことにします。

どんな人であっても、地獄に落ちることはない。どんな人であっても、神の国には居場所がある。この「住まい」は宿泊所などの一時的な場所ではなくて、永久的とはいかないかもしれないけれど、ある程度、恒常的にいる

ことのできる場所のようです。もちろん、寿のまちでは「宿泊所」は一時的に滞在する場所である、という定義はできないのはご承知のとおりなのですから。

ここでヨハネ福音書が示しているのは「絶対的な場所」。場所を確保する必要もない、満杯になることもない、そんな場所です。つまりはわたしたちの想像では追いつかない場所。なぜそんな場所を示す必要があったのか。簡単なことです。わたしたちが生きる世界には、そのような場所など存在しないからです。だからこそ、夢想したかったのでしょうか。

しかし、独自の神学を展開しているヨハネ福音書も、後になりに編集者による付加文が挿入されているようです。直後の三節には矛盾した言葉が記されています。イエスが場所をつくって戻ってくる、と。そんなことは少なくともすでに存在している場所のはず

なのに。こうして、もともとなかったイエスの「再臨」が付け足されています。教会の伝統にそった神学を展開しようとしたヨハネ福音書の記者の文章に、さらなる付け足しをする。そうして、イエスがふたたび「この世」にやってくるというシナリオを挟んでいるわけです。

## ■現代から読み取る「居場所」

この物語から、現代を生きるわたしたちは、どのようなメッセージを読み取ることができのでしょうか。

わたしはここから「居場所」について考えてみたいのです。居場所とは、何か。それは自己実現の場であるかもしれないし、自分自身がひとつの存在として認識される場かもしれない。

ヨハネ福音書の記者が考えたように、「絶対的な場所」は存在しえないものだと、わたしたちも認識しているはず。しかし、多くの「良心的」な教会は「誰をも排除することのない共同体」をスローガンとして掲げてきたのではないのでしょうか。なか伝道所も同様なのではないのでしょうか。

誰かが誰かとつながっていかうとする、課題を共有しようとするとき、他方では、誰かが排除されていく。共同体とはつねにそのような現実を抱えています。つまり、人びとが居場所をつくっていくとうとするとき、そこからはじき出されていく人たちがいる。

## えーとねえ

(トースターの前で)

父 「パンが焼けるから見ててね。」

花 「はい。」

……

花 「そろそろ、焼けるよ。3・2・1、はい、さっぞー!」

母・父 「自分で取らないかい!」

(ある意味任務に忠実な 花一〇歳)

だからこそ、わたしたちは、「誰をも排除することのない共同体」というものを模索しようと思います。しかし、果たして、それは可能なのか。たとえば、ストーカーやドメスティック・バイオレンスの加害者たちをわたしたちは何もしないで受け入れることはできるのでしょうか。もし、被害者やその人にとっても近い人たちがいたら、どうでしょう。か。加害者をも受け入れようとする「誰をも排除することのない共同体」は、そのとき、被害者への二次被害をひきおこす。そして、被害者を群れから排除することになる。きわめて現実的なことです。つまり、わたしたちは「誰をも排除することのない共同体」が、実際にはいかに嘘(うそ)さい

理想であるかを知ることになるはずで、す。そのような結果に陥らないためには、加害者のひとには一時的に退散(たいさん)していただく決断(けつだん)が必要(ひつよう)になることもあ

るのでは無いでしょうか。政治思想(せいじしやう)の研究者(けんきゆうしゃ)であり、フェミニストでもある李静和(りせいわ)さんは、「共同体」をつぎのように位置(いち)づけています。

全体的(ぜんたいてき)に見(み)ると、「一緒に生きる(いっしょにいきると)いう、いわゆる従来の共同体(きょうどうたい)という、あらかじめ上(う)から、あらかじめ意味(いみ)として与(あた)えられたものとしての

## まど

▼赴任(しゆにん)して一ヶ月(いっかげつ)。礼拝(らいはい)では生意気(せいき)にも「禁欲(きんよく)しております」などと何度(なんど)も述べているのですが、教会(きやうかい)の「外(がい)」のお話を少しご紹介(ごしょう)しておきます。

▼四月(しがつ)から寿地区(じゆ地区)活動委員会(かつどう委員会)のメンバーとして加えていただきました。毎週(まいしゅう)金曜日(きんようび)の炊き出しをはじめ、ことぶき福祉(ふくし)作業所(かぎあそ)の昼食(ひるめし)づくりボランティア、寿地区(じゆ地区)センターの月例(げつれい)バザー、夏まつりにむけての有志(よし)の準備(じゆんび)など、いくつかの場所に寄せていただきました。つないでくださったのは地区(ちく)センター主事(しゆじ)の三森(みやもり)妃(ひ)子(こ)さんや、なか伝(なかつた)の信徒(しんたい)の方々(たがた)。感謝(かんしゃ)です。

▼なか伝(なかつた)の日曜日(にちようび)はとても忙しい。さまざまな行事(ぎぎ)があり、集(あ)まった人(ひと)びとと向

共同体(きょうどうたい)ではなくて、アメーバ(ameeba)のような、細胞(さいぼう)のような、数多(かずおほ)くの断絶(だんぜつ)の瞬間(しゆんかん)を踏(ふ)まえつつ、全体的(ぜんたいてき)にはつながっている、連続性(れんぞくせい)をもつ空間(くうかん)として成り立(な)つ関係(かんけい)、それが私の言(い)いたい共同体(きょうどうたい)である(な)李静和(りせいわ)、一九九七(じゆういちゅうしち)、「つぶやきの政治思想(せいじしやう)——求められるまなざし、かなしみへの、そして秘(ひ)められたものへの」『思想(しやう)』第八七六号(だいはちしちろくごう)。

安定(あんてい)した実体(じつたい)としてではなく、「連続性(れんぞくせい)をもつ空間(くうかん)」として、共同体(きょうどうたい)をとらえること。そこには「数多(かずおほ)くの断絶(だんぜつ)の瞬間(しゆんかん)」も含ま(ふくま)れうる。ときに矛盾(むじゆん)することがあり、ときに決裂(けつれつ)が生(う)じることもある。「連続性(れんぞくせい)」のなかで試行錯誤(しこうさくご)をつづけるネットワークとしての共同体(きょうどうたい)です。そうとらえることで、人(ひと)びとが生(い)きる現場(げんば)を表現(ひょうげん)することはできないの(な)もしれません。

\* \* \*

## 編集後記

なか伝道所(なかつたうじよ)の招(まね)きに応(こた)えて下さ(くだ)った堀江(ほりえ)牧師(ぼくし)の思(おも)いが、身(み)に迫(おぼ)るような学(まな)び習(な)った。堀江(ほりえ)牧師(ぼくし)の古(ふる)くからの友(とも)人(ひと)も何(なん)人(にん)か参加(さんか)され、独自の視(し)点(てん)でもと興味(きょうみ)深いコメ(こ)メントを(を)いた(いた)だ(だ)いた。機(き)会(かい)があれ(あれ)ば、みなさん(みなさん)から学(まな)ぶ場(ば)を持(も)ちたい(たい)と思(おも)った。(にん)

### 2016年度支援会会計報告

(収入の部)	
前年度繰越金	86,068
支援献金	465,600
クリスマス献金	370,900
収入合計	922,568
(支出の部)	
振込み負担金	9,280
通常会計へ	898,838
次年度へ繰越	14,450
支出合計	922,568

なか伝道所(なかつたうじよ)支援(しえん)献金(けんきん)のお願い(ごんい)皆(みな)様(さま)のお支(し)えにより前(ぜん)年度(ど)も必(かなら)ず要(よ)が満(み)たされ(され)ました。心(こ)より感謝(かんしゃ)し、ここ(こ)にご報(ほう)告(こく)いた(いた)します。今年(ことし)は新(あたら)しい牧(ぼく)師(し)を迎(むか)え、同(どう)時(じ)に伝(でん)道(だう)所(じよ)設(せ)立(り)三(さん)〇(じゆ)年(ねん)を迎(むか)える節(せつ)目(め)の年(ねん)に(に)なり(なり)ます。支(し)援(えん)会(かい)の皆(みな)さん(さん)の支(し)えを(を)あらため(ため)て感謝(かんしゃ)いた(いた)します。私(わたし)たちは(は)これ(これ)まで同(どう)様(さま)「貧(ひん)しい人(ひと)々(々)への福(ふく)音(ね)にと(と)もに(に)あ(あ)ずかる」実(じ)践(けん)の伝(でん)道(だう)所(じよ)で(で)あり続(つづ)けたい(たい)と願(ねが)って(て)います。今年(ことし)も皆(みな)様(さま)のお祈(いの)りと支(し)援(えん)献(けん)金(きん)へ(へ)のご協(きょう)力(りき)を(を)願(ねが)い(い)た(いた)します。